

## 決断する勇氣

野瀬 隆平

「止められない暴走列車」のようであり、これは「金と威信のためだ」

日本のオリンピック関係者が、開催に向けてつき進んでいることについて、イギリスのタイムズ紙が、三月三日付の紙面でこのように評した。

IOCの委員の中にも、「再延期は不可能であり、今年開催しないのなら、延期ではなくキャンセルしかない」と発言している人もいる。日本国内でも、今年の開催は無理だと考えている人は多い。読売新聞の世論調査では、六〇%以上の人が、「中止すべき」あるいは「再度延期すべき」と答えている。

オリンピック組織委員会に、新たに十二名の女性理事が加わる事となった。最初は、単に数合わせの為であり、評価する気にはなれなかった。

しかし、開催するのが当然のこととして運営してきた組織に、新たな理事が加わることによって、環境の厳しさを冷静に受け

止め方向転換が図れるのではないかと、期待するようになった。

それでもまだ推進したい人たちは、万全の感染対策をとれば可能だと考えているようだ。全豪テニスの場合、どれだけ慎重に手間をかけて感染防止対策をとったかを見ればよい。いかに大変だったことが解る筈である。海外から来日する選手とその関係者だけでも、その数十倍、いや百倍ほどの人が来るのである。

開催までに日本ではワクチンも行き渡らず、医療現場の逼迫した状況も改善されていないかも知れない。選手を派遣する国でも、残念ながらコロナは収束せず必死の闘いは続いているのではなからうか。

折角ここまで多額の費用を掛けて準備してきたのだから、今更という気持ちも理解できなくはない。感染対策の為におよそ三千億円の追加費用が用意されているという話もあるようだ。

経済学には「サンク・コスト」という言葉がある。これまで掛けてきた費用が無駄になりもつたいないからと判断を誤ると、追加費用を発生させてしまい、結局は早く止めておいたよりも、多くのコストを負担するはめになることを教えている。